

私たちには当面、次のような柱を立ててある。

『課題報告』

一 酪農民の生活と地域社会——酪農民にとっての生活破壊とは何か——

北海道大学 布施鉄治
北見工業大学 白樺久
札幌大学 酒井恵真

序

私たちの研究グループは、ここ数年、国策による大型酪農経営の形成が急ピッチで進められ将来のわが国の酪農生産基地として指定されている北海道の酪農民の生活に関する調査研究をすすめている。その一つは二年前の本大会で、根釧地方の標茶町虹別地区での事例研究を発表し、年報一集にまとめて来た。その後、標茶町の事例分析を更にすすめつつ、同時に、畑作から酪農へと地域農業生産構造の変動が急速にすすめられている十勝地方の大樹町での調査研究をおこなって來た。

本報告ではこれらの調査研究を踏まえつつ本年度の課題である「農民にとっての生活破壊とは何か」ということに焦点をあてて、若干の問題提起をおこないたい。

I 現時における酪農経営の急速な「大規模化」がもつ問題点についてはすでに各方面から指摘されている。例えば「新全総点検作業中間報告（素案）——農林水産業問題とその対策」（国土庁計画調整局、一九七五年一月）もこの点についてふれている。私たちはまず「点検素案」の問題指摘と、それの基本的方向にそつて出された農林省の「第三次酪農近代化試案」（一九七六年三月）における現状把握の論理についての検討を、北海道における酪農生産において現に惹起し、指摘されている諸矛盾との対応において、行なうことから始めようと思う。そこでは、酪農生産においては、従来みられなかつた「地力減退問題」も提起されている現実にもふれるところになる。

II 次に、現実の酪農民の生産・労働——生活レベルにひきつけての問題提起をおこなう。まず「家」レベルでの問題である。
(1) すなわち本年度大会における共通課題△農民にとっての生活破壊とは何か△を考える際、それはすぐれて資本の価値増殖の論理のより一層の進展の中でもたらされるものとして、いわゆる「農民層分解」の具体的進展の中に位置づけられねばならないと考えているが、まず、それを酪農民の生産・労働——生活史の文脈の中に位置づけてとらえる。現実の酪農生産が家族協業経営として営まれて以上、そのレベルにまで立入つて考えてみると、各農家の有する戦争体験の傷あとが「家」の世代的継承発展の問題として深く残つており、現段階においてそれは「後継者」の問題につながりを持つ

ていることがわかる。

〔問〕 次に現時における「家」——生産・生活組織体——の構造を各成員の協業の内容の検討から問題とする。ここで私達は各成員の「家」の意志決定の参与の形態と、現実の作業分担のレベルから問題をときおこすが、まず第一に、現在においては、私達のいう「家父長型」の「家」はその大宗ではなくなっているということ、さらに、直接的な作業分担——生産労働と家事労働——という側面からみると次のことがあきらかになる。すなわち現時の乳牛の急速な多頭飼育化は、生産諸手段の機械化、高度化を伴って、たしかに乳牛一頭当たりの所要労働時間を短縮、軽減させるが、その多頭化は、全体としての家族労働の所要時間を増大させ、ここに家族成員の健康破壊の問題が提起されざるえないということ、そこには、たしかに階層差が看取され「農民層の階級、階層分解」の諸結果が反映されていふこと、健康破壊の問題を論じるさいには、その中間項として「家」の構造のあり方、またより基本的には「家の世代的発展の段階と、さらにそれらの「家」が直系家族であるか、夫婦家族の形態をとらざるをえないものとしてあるのかという問題をさけることは出来ない。現時における「大規模」酪農経営が家族協業經營形態として営まれている以上、かかる点は看過出来ない。

〔問〕 もとより個々の「家」はその現にもたらされている諸矛盾を解決するために、さまざまな努力を、すんで「家」をこえるレベルにおいておこなっている。ここに「村落社会」レベルでの問題、その変容、変革の問題が提起されるということになるが、現時点に

おいては、その一般的な分析の道すじとしては「家族協業經營形態」から「社会的協業經營形態」への移行が問題とされざるをえないと考える。ところで現時の酪農生産、およびその村落社会の変化をとらえるかぎり、とりわけ次の諸点に注目する必要がある。

第一は、村落社会内部における諸問題を理解するさいの「家」相互間の結びつきである。それは「家」の出自に基礎づけられた血縁のネットワークが北海道社会においても、本州と同様に形成されている故、そのレベルに立ちかえつてその構造をあきらかにするといふこと、生産・労働——生活上の諸関連が当然に問題となる。しかしこれでとりわけ問題とされざるをえないことは、現時の「上層農」それ自体が体制的に育成され、また「下層農」は淘汰されている、ということである。

第二は、実はこのこととふかくかかわるが現段階における▲農民にとっての生活破壊▽と村落社会の存在形態、その変動方向を理解するためには少なくとも市町村レベルでの地域的範域にその射程をひろげて問題を理解することの必要性である。北海道の酪農村の場合、農民層の階級、階層分解はきわめて激しいが階級分解を余儀なくせられた農民層の滞留地として「市街地」は位置づけられてい

している。かかる層は現段階においては基本的に賃労働者層として位置づけられるとはいえ、かつての、とりわけ直系家族として「家族協業形態」を崩さざるをえなかつた層である。つまり直系家族の発展継承の系列を若年層の流出によつて崩され、夫婦家族、そしてさらには単独老人世帯とならざるをえなくなつた層が、市街地に滞留しつつある。これには勿論、地域諸機関とりわけ老人世帯に関しては、地方自治体の最低生活水準維持の施策が今日の段階において不可欠となつてゐる。

第三に問題とすべきは現時の酪農經營における社会的協業經營のあり様であるが、家族協業經營を主体とするかぎり、村落内における社会的協業は機械およびサイレージ作業に限られざるをえず、それらを統合するものとしてとりわけ農協をキイステーションとした「地域酪農生産の分業化、システム化」が大きくすすめられているということ、勿論、これに対して村落（実行組合）を単位としての「法人化」傾向も、私たちが調査した限りでもあらわれつつある。しかしそこにみられるものはいづれにしても自生的な村落社会ではなしに、その社会はすんで「機構」との連鎖をもちつつ、自らを再生せざるをえないし、また再生しつつあるものとして把握されよう。

現段階において▲農民にとつての生活破壊▽、また△労農同盟▽が問題とされる場合も、少なくとも上述のレベルにおいての一定の問題提起をしたいと私たちは考へてゐる。